
紀元前46

イナリズーシ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

紀元前46

【Zマーク】

Z4594M

【作者名】 イナリズーシ

【あらすじ】

前世の記憶を思い出していく少女の話。ゆるゆるバージョン。力チカチバージョン。マニアックバージョンでそれぞれ違う感じで書いていこうかと一応計画中

普通の日本家屋の屋敷

少女が一人、グース力昼夜してました。

背後から忍び寄る影・・・

でも誰も居ない。

と、その時、少女は目覚める。

周囲を見渡し、周りに何も居ないのに居るかの様に逃げ惑う。

時間は昼間。

明るい部屋でまるでオバケが出たかの様にパニックを起す。

9 j 2 m g p b ; r m g g 9 4 3 ; g . 1 f . j q w n . . . a @ ' @ @
@ @ @ @ @ a k h a o a e e g e a e r . j g a o w j g ' ' e a 9 4 3 9
3 9 r 2 m b k b ; g p a j u b 9 w t v n q 3 4 n g y 3 t n y v
5 o i v v i m i h n h m 9 8 3 q 4 o v 9 m 5 h c , 0 2 9 w t k
y , h q 0 2 3 9 4 v , c h 3 q c 3 q 0 3 0 9 2 t c c y 5 3 j
l k f n g g k j c r n t g g k . j p p y y j 5 j

少女の脳内に何かのノイズが入り込んだ。目を白めにして瞼をパチパチさせる。

その間約15秒。少女は一粒の涙を零した。

”どうして・・・

”どうして私はあの時自殺してしまったのだろうか・・・”

少女の過去が巻き戻される。

遠い昔、約2000年前の記憶。

全ての時間が巻き戻されるかの如く。

その時に見えたのはクレオパトラ。それが自分。
自らの手で自殺をした。

誰も死ぬ理由を知らぬまま、ただ、自己満足の為に死を選んだ。
転生し不老不死を得る為、いたゞきよく失敗を認める為、責任を取る
為。

だけど、責任とは何とか 責任の意味を 死ぬときの私は全く理解
していなかった。

死した直後から私の懺悔は始まった。

いつも私のために着替え等の身の回りの世話をしてくれる彼女。
彼女が私の死体を最初に発見した者であり、そして私の自殺に最も
苦しむ者だった。

”私は毒蛇を自殺に使う為 彼女に持つて来させていた”

次に苦痛を味わわせたのは息子のリオン

”なぜ、親である私は子供を捨てて逃げた！ 馬鹿にも程がある
！”

そしてアントニー・・・

全ての不の連鎖はここから始まつたと言つてい。

そしてその連鎖のキッカケは全て私から始まつていた・・・

“めんなさい・・・
許してみんな・・・

1（後書き）

書き終わるのは1年後くらいかなw
ちなみに題材としているのが京本20先生作の『前世の記憶』となります。

ネタばれ含めて物語が気になる人は、そちらをご覧あれ。

いきなり番外編 本編とは全く違う

大きなデカイ屋敷。そしてミスボラシイ屋敷。

少女が一人、グース力昼寝してました。

背後から忍び寄る影・・・

でも誰も居ない。

と、その時、少女は目覚める。

周囲を見渡し、周りに何も居ないのに、居るかの様に逃げ惑う。
時間は昼間。

明るい部屋でまるでオバケが出たかの様にパニックを起す。

9 j 2 m g p b ; r m gg 9 4 3 ; g . 1 f . j q w n . . . a @ ' @ @
@ @ @ @ @ a k h a o a e e g e a e r . j g a o w j g ' ' e a 9 4 3 9
3 9 r 2 m b k b ; g p a j y b 9 w t v n q 3 4 n g y 3 t n y v
5 o i v v i y i h n o h m 9 8 3 q 4 o v 9 m 5 h c , 0 2 9 w t k
y , h q 0 2 3 9 4 v , c h 3 q c 3 q 0 3 0 9 2 t c c y 5 3 j
l k f n g g k j c r n t g g k . j p p y y j 5 j

少女の脳内に何かのノイズが入り込んだ。目を白めにして瞼をパチパチさせる。

その間約15秒。

少女はそのノイズから解放されて何事無かつたの様に、また、恐れパニックを起しあげた。

目と耳をふさぎ込み、押しづれの中に隠れ、何かがどこかへ去るのを待ち続けた。

20分後、その気配は消え去り、少女は安堵して押入れから出来

た。

冷や汗まみれのであるが、時は夏場でエアコンの無い時代。部屋の温度は30度を超えていて、汗まみれになっている。

「後書き」

その汗は、本当に冷や汗ですか？

「前世の記憶」

少女は、その日から少し変になつた。

急に歴史に興味を覚え始め。前世の記憶に関する書物を読み漁る様になつた。

歴史を知るほどに自分の過去の記憶が蘇つた。

少女には前世の記憶が見えていた。それは原始時代から始まる記憶。

そしてなぜか、遙か未来50年後、2028年の未来が見えていた。

未来では、巨大隕石が地球に接近し人々に混乱が及び、そして不死老不死の技術が開発されて、人々は異質な生活を送るのが見えた。

人々は宇宙船に乗り込み。火星、木星、土星を眺めていて、人々の姿形は異型。

当時の彼女には、それは異型であるが、現代ではある程度予測可能なあり方に違いない。

その事に気づかない彼女は、幻や幻覚だと思い込み、いつしか普通の生活に追われ、結婚し子供を生み幸せな日々を送る。

かに見えたが彼女は包丁を持ち 真剣な眼差しで刃の先を見つめている。

顔面蒼白で、息を荒げ、鼻から汗が滴れ落ちる。

落ちた汗は、床に落ち、畳をぬらした。

田の下から涙を浮かべる。

部屋は静まり返り、古い電機が力チカチと寿命を知らせる。

とその時、鬼の様な形相で彼女は家を飛び出した。

向かう先は、姑の家。

彼女は、姑にプリンを食べられたショックで実家へと帰り、憎悪にとりつかれていたのだ。

いつ、殺そうかかと思案した拳銃にて、ついに行動を起して飛び出したのだ。

「止めなさい！ 妹よ！」

セクシーな姉、細記數子が身を呈して止めに入った。
無意味にロングストレートヘアをなびかせる。

グサリ！

姉ちゃん刺さりましたー！

鮮血が壁一面に吹き飛ぶ。

その正体は、ケチャップソース。

「これからオムライスを食うのだから、手伝え！」「

「え？ 姉ちゃん。今日の『』飯はオムライスなの？ わ〜い〜（

* 、 * ）ノ

2人は何事も無く、その日を終えた・・・

彼女は包丁を持ち、真剣な眼差しで刃の先を見つめている。顔面蒼白で、息を荒げ、鼻から汗が滴れ落ちる。

落ちた汗は、床に落ち、置をぬらした。

田の下から涙を浮かべる。

部屋は静まり返り、古い電機がカチカチと寿命を知らせる。

とその時、鬼の様な形相で自分の腹に刃を突き立て様とした。彼女は、腹が痒かったのだ。その痒みの苦痛で、憎悪にとりつかれて、自殺を図ろうとした。

「止めなさい！ 妹よ！」

セクシーな姉、細記數子が身を呈して止めに入った。

無意味にボインをなびかせる。

グサリ！

姉ちゃん刺さりましたー！

今日は、ほんとに刺さりましたーーー！

「腹の中に子供が居るだらうが馬鹿ーーー！」

「え？ あ？ 忘れてたーーー（。 。 。）

2人は何事も無く、その日を終えた・・・

（この5年前の話）

当時、19歳の彼女は、旦那候補と出会つたばかりでした。そして今日は、デートを予定している。

「細記ジユニアさーーーん！ お待たせしましたーーー！」

公園のベンチで待ち合わせした2人。目の前に現れる彼の姿は馬でした。

白馬の王子ならぬ、そのまんま馬です。白い野良馬です。2人が出会ったのは、さかのぼる事、数日前。

道場に偶然落としたハンカチを馬が拾ってくれたのです。

「ヒヒーーーん！　じゃあ、行きましょうか、細記さん。」

2人は、互にまだ知り合つても間もない。1メートルくらいの距離を空けて並んで歩いています。

その後、一人は喫茶店の中でお茶をしている、馬はビズメを使い器用にカップを握る。

「ひひーんひーん　ブルブル」

2人の笑顔がそこにありけり。

と、突然、謎の美女、ボイン横を過ぎ去つていく。

「ひーーーん！　ひーーーん！」

馬は明らかに興奮気味。

それを見た細記ジユニアは嫉妬し、そそくせと返つてしまつ。

帰り際に

「畜生田！　馬の癖に！－！」とぼやきつつ・・・

数日後、馬から電話が掛かってくる。

「馬だつたら、私は留守つて事にして～」

とジユニアは姉ちゃんに頼むが居ると言つ。

渋々電話に出るジユニアは、映画に行こうと誘われる。

まあ、いつか、おじつてくれるつていひ、見たい映画だし・・・

翌日

馬と一緒に暗闇で映画を見てます。

そこへチンピラが絡んできました。

「おお～ 可愛い姉ちゃんじゃ ねえか～。この映画終わつたあとど

うよ。俺らと『テート』しようぜ」

肩に手を寄せるチンピラ。

恐怖したジユニアは横目で馬を見る。

馬は反対方向を見つめ口笛を吹いている。汗だくで必死に他人の振りをかます。

失望

番外編つづく

「これを貢物だと言つてカエサルに渡して頂戴」
クレオはカエサルの屋敷の外でじゅうたんにグルグル巻きになつた
状態で言つた。

兵士はキヨトンとする

「クレグレも中に私が入つてる事は誰にも教えるな」
兵士5人は、カエサルの元に貢物を持ち連れて行く。
壁に何度もぶつけられ、たどり着く。
「エジプトの王女クレオさんからの貢物です。」

地面に落とされるクレオ

じゅうたんモゾモゾ、オープ
「おっちゃん、ひさしふり~」
「うわああ~」
「どう? ビックリしたおっちゃん?」
「そりゃあ、ビックリするわ!」
「ところでおっちゃん・・・」
「なんだいきなり

「おっちゃん! すまんけど、私つを助けてくれ。

「こきなり、ビックリした?

「パパが死んでさ、いま、私が王様じゃん。でも、女ジャン。女の王だから他国に舐められても困るし、背後におっちゃんの権力があるのを、世界に知らしめてくれない?」

「いいよ～！ でも、その代わり抱かせり」「ひせり」

「やつたー！」

クレオはカエサルに肩車される

「お！ 重い・・・

崩れる。

「昔の様にはいかんな。

「だね w

2人は別々の国を統治する者である。クレオはエジプトの王でカエサルはローマの大統領みたいな感じで親戚であった。

<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%95%AE3%82%A1%E3%82%A4%E3%83%AB:Pietro-Dal-Cortona-Lyon.jpg>

こんな絵ながんじで、ローマとエジプトは仲良しですよ～といつの世界にアピールした。

次にペリラードの工事を行たクレオ

「なあ、幼馴染よ。どうせ作るなら先代よりもっと凄いペリラードを作りたいのだけどどうすりやええの？」

幼馴染「そうだな・・・とりあえず、聞いてくる。ちよつとマシッテテ

数日後

幼馴染「専門家に任せれば良いと思うよ。信用の置ける技術者を既に見つけてるから。このセバスたんを利用すればいい。あと、労働者たちを呼び込むのも任せとけば良いと思つ」

セバスたん会議が開かれる。

なにやら難しい言葉を並び立てて議論を立て白熱するも、読者には見えない。

ローマに呼びかける貿易師

「小麦を大量に買えーー

他国に呼びかける求人師

「飯が食えるよー 小麦で当田現物しきゅうだよー 住む用意、自給・・・で超お得だよー わんさか人が集まる。

舟漕ぎ師の船にのり込みわんさか

3000人くらいくらいが、あらゆる土地から集まる。

労働者は小麦受け取り働くを繰り返し、弁当を受け取る。

「さんきゅー幼馴染。ついでに幼馴染のも作ろつか?」

「ええのん? 結構かねかかるよ。」

「ええよええよ。幼馴染の中じゃんか」

ピラミッド建設画終了

2人は何度もピラミッドを見に行くも専門家の難しい説明に訳が判らず直ぐに飽きた。

「ほら、星が綺麗だね～」

「あ、流れ星――――――」

飽きた二人は星眺めていた。

ナ

こんなチャランポランな王でも実際は結構頭が良かつた。
7ヶ国語話せるし歴史にも詳しい。

普段は真面目に貿易の仕事なんか頑張っちゃってるよ。
まあ、金持だから、他にやる事無いだけですか・・・

力チカチ 1

紀元前46

クレオパトラ 約25歳

クレオのパパが死んで葬式に来た世界各国の要人。葬式が終わり要人達はエジプトの国内のそれぞれの別荘地で滞在していた。

その中にローマの王カエサルが居るのだが、その元へクレオが手土産を持ち訪問する。

「これを貢物だと言つてカエサルに渡して頂戴

クレオはカエサルの屋敷の外で籠中に入り込みビックリ箱になる。兵士はキヨトンとするも一国の王なので逆らえない。

「クレグレも中に私が入ってる事は誰にも教えるな」
兵士たち5人は、カエサルの元に貢物として連れて行く。
丁重に扱われゆつくりと王座の御前にそれはたむけられる。
「エジプトの王女クレオさんからの貢物です」

「中身は一体なんだ?」

「・・・・」

兵士は目を背ける。

答えていけど答えられない。

と、その時

クレオはジャーンと飛び出した。

一同沈黙。

兵士白々しい目。

そもそもそのはず。貢物という単語にエジプトの女王が淫乱でフシダラな女だと兵士の目に映ったのだ。
ギャグが受ける訳がない。

「あははは」

笑うカエサル。

ソレもそのはず、カエサルとクレオは親戚である。
反面、兵士はカエサルのそのリアクションに人として王としての不信感を抱いた。

カエサルは女遊びが好きだし、クレオともそういう仲だと思つたのだ。

自分たちが必死で働いているのに、いちやつきふりに腹を立てた。
だが、兵士は我慢する。

疑問や質問はしてはいけないルールなのだ。

そうして事情の知らない兵士からクレオの悪説が少しつづり、そして確実にローマに広がっていく。

「してエジプト国の王女よ。今日はイキナリどうしましたしましま
します

「おじ様、そのギャク変～～～ w

「うんぬ。しかし、この度は大変でした。そうして明るく勤めて
る様子から察するに少しは・・・

クレオは泣いていたが隠していた。

「そつそつ強い者である訳には行かぬな。もつと近くよれ。

クレオはカエサルへ歩み寄る

「しばらぐ一人だけにしてくれ」

カエサルは付き人に命令する。

と、言ひのは嘘よーん。

この時のクレオパapaは死んでからミライ化するまで結構時間あったし、病氣で先が短いの判つてたから覚悟する時間は一杯あつたのね。

今日はあくまで、仕事の一環としてこのカエサル邸に来たのでした。

以下は、職務上のツマラヌ会話に成りますので読み飛ばしてください。

～ツマラヌ文章～

「うんぬ。しかし、この度は大変でした。やつじて明るく勤める様子から察するに少しは・・・

「既に父上の死は乗り越えて御座います。もつ、昔の様な泣き虫ではありませんよ」

「泣きすがるのでは我としては良かつたのだが・・・まあ良い。しばらく一人だけにしてくれ」

カエサルは付き人に命令した。

「さて、葬儀の場では無く、わざわざいついて我のもとへ来たという事は何か政治上の事ですか？」

「察しの通りです。

「とりあえず言つてみよ。

「はい・・・実は王を継承する事に対して自信が無いのです。

「どういつ風に?」

「私は武力が嫌いです。大切な労働力を失う事は国の発展を妨げる
ものと思っています。しかし、王が女である以上、民や他国からも
信用されないのだと無いかと・・・

「そうか・・・しかし、余り考えすぎない方が良いぞ。女が納める
國を狙うというのは戦争を仕掛ける者の恥である故に、寧ろ安全と
いうものだ。

「は・・・はあ。

「だが・・・最善を尽くすに越したことはない。出来る限り力を貸
しましよう

「よろしいのですか? おじ様! いえ、カエサル様

「まあまあ、こういう時だけ敬語を使いなさるな。私はエジプトの
永遠なる味方なのだから・・・

「勿体ないお言葉です」

「もうよい。その話し方虫唾が走るわ

2人は笑った

その後、カエサル指揮の下で調印式が行われエジプトは安定した。クレオは国王としての仕事に黙々と励む日々を送った。

「幼馴染の存在感」

前書き クレオパトラ＝ネフェルティ

会議ではいつも居る。

重要な時もそうでない時も
画面のフレームに入っている。

「ネフェルティをどう思っているかですか？」

「そうです坊ちやま」

「どうして・・・私は別に

「好きなんでしょう」

硬直

「判りやすい方ですね・・・

「しかし、私がどう思おうとも彼女にはそんな気は無いよ。名前で呼ばれることがなんて一度もないし・・・そもそも覚えてなかつたし・・・

「それは爺も存じております。

「でしょ。

「ですが爺は、このまま坊ちやまが結婚も成されず一人で居るのが心苦しいのですじや

「・・・

「試しに結婚を申し込んではいかがでしょう。

「なつ！…何を馬鹿な事を！

「馬鹿ではござりませぬ。万に一つでも可能性があつたらどうあるんですか？ 何もしなければ何も起こりませぬぞ。」

「よし、判つたよ。やってみる

晚餐にクレオ招待した。

でも、切り出せない。

「結婚しないの？」

死んだ旦那の事の話になつて気が重くなる。
やはり諦めてしまつ。

友達として接する事にふんざる事に。

そう決断したら気が軽くなる。

王宮に出向く幼馴染。

「最近、仕事入れすぎじゃないか、息抜きに遊びに行かないか？

「え？ でも、、しばらくは仕事入れてるし・・・。」

「そんなの 誰かにやらせておいてもいいだろ。どこか遊びに行こうよ・・・。」

「でも・・やつぱり・・私がしないと・・・またいつかね遊びより仕事をとられる。」

クレオフケ 国語ペラペラで仕事るばかりで幼馴染は溜息。

ピラミッド建設完了時にて

クレオ「出来てきたね~

幼馴染「そうだね。ところで・・・シチリアで美味しい豆料理見つけたんだ。この時期は風が涼しいしちょっと遊びに行かない?

「おお凄い！ あんなデカイのてっぺんにビリやつて運んだのだろうね。

聞いてません

「シチリ

走り出すクレオ

「うわわ！ 表面ツルツルだ~

専門家の話を聞き夢中になる。

「未来の人々は このピラミッドなどを見て ケガし びっくりするでしょうねえ」

「そ・・・そうだね。

笑うクレオと苦笑いの幼馴染。

マニア1

エジプト国王クレオパトラの父の葬儀の場にて、
独り言をしているクレオ

「そりいえば父上と一緒にいた思い出つてそんなに多くないな。
いつも公務ばかりで
最後に話したのいつ・・・」

「過去回想」

星の観測所にて、おぼろげに父が自分に話しかける姿が見える。

「何はなしたんだけ？
結構最近の事なのにおぼえてないな・・・」

「過去回想 子供の頃」

王宮内

「今、帰つたぞ。」

「父上酒臭いよ」

「大丈夫大丈夫」

「何が大丈夫なのさ？」

「そうだった。」

父上、いつも公務が急がしくて相手して貰えないけど、一回
必ず抱きしめてくれた。

「過去回想 更に昔で子供の頃」

クレオは両親一向とローマのカエサル邸に向かつていた。

パパ「久しぶりに叔父さんに会つんだからな。ちゃんとしないと駄
目だぞ？」

クレオ「あい。ってか叔父さんって何？」

パパ「叔父さんと言つのはお父さんのお兄さんといつ意味だよ」

ママ「やつよ、叔父さんには失礼の無いようここにカエサル様と言つの
よ」

クレオ「あたしとカエサルさん会つたことがあるの？」

ママ「ええ。赤ちゃんのときとか 高い高いして貰つたのだから」

＝「 プチ回想 カエサルに高い高にして貰つて、おしつこを掛ける＝

「うは～～～！」

高度リアクション

「シヨウペー！」

背中にオングブして走らされるカエサル。

そしてダウン

「兄さん、戦士なら諦めたちや駄目だよ

＝「 プチ回想 END ＝

クレオ「全然、覚えてないよ」

パパ「そりやそうだ。」

ママ「そうよね」

笑う両親

クレオは何で笑われてるのか判らない。
キヨトンとしている。

「 ちょっと何が可笑しいの？ ねえつてば」

馬車はひた走り、ローマに到着

門を通り抜け降り、待ち人に迎えられ宮廷へと案内される。

緊張したおももちのクレオ

時はながれて

王宮内にて

「ほ～らほらほら」

「叔父様、すごーい」

クレオは力エサルの筋肉質な腕に捕まっている。
腕を上下に動かす力エサル。

ママ「御免なさいね。クレオったら遠慮が無いもので

力エサル「まあまあ、この筋肉にいすれ衰える。今のうちに有効活
用しあきませんとな。

ママ「有効活用つて」

笑う

（回想おわり 葬儀場所にて）
クレオの心の眩き

そういうえば、あの時も父上は公務で居なかつたな・・・。
唯一の一緒に一日過ごした日だと思っていたけど、過(い)したのは
カエサルだつたか・・・。

父上は本当に忙しい方だつたな・・・。あれ程までしなければ王
は務まらないのだろうか、私は王として勤めが果たせるのだろうか・
・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4594m/>

紀元前46

2010年10月9日12時42分発行